
サクラの花が咲く頃に

ゆうちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラの花が咲く頃に

【Nコード】

N7269C

【作者名】

ゆうちん

【あらすじ】

不良少年達の生き様や恋愛の物語。

プロローグ

「今日から中学生か……。学校行くのなんて面倒くせーなあ。」
寝癖でひどい事になっている頭をボリボリと掻きながら、祐二は大きな溜息を一つついた。

祐二はもともと学校が好きだったのだが、小学校6年生の時に担任になった、駒田という教師のお陰で学校が大嫌いになったのだ。

祐二は背が高く、性格もヤンチャだった為に、非常に目立った。その存在感のお陰で、駒田に祐二は目の敵にされていた。

祐二の通っていた榊小学校では、大概は祐二達の悪ガキグループが何か問題を起こす。

問題といっても、授業を少しさぼったり、喧嘩や、ちょっとした悪戯、夜遊びといった程度のものだ。

それらを注意されても、自分に否があると思った場合は、祐二は一切反抗しなかった。

ある日、クラスメイトの給食費が無くなるという事件が起きた。

駒田は真っ先に祐二達を疑い、祐二達のグループを職員室に呼び出した。

駒田は、祐二達が給食費を盗んだと最初から決め付けていた。

「正直に言えば、許してやる。」

祐二達を呼び出し、駒田は開口一番こう言った。

「給食費なんて、盗んでねーよ！なんで俺だって決め付けたんだよ！？」

身に覚えのない祐二は、潔白を主張したが、駒田は聞く耳を持たず、口答えするなとばかりに、平手打ちを食らわせた。

結局、祐二が最後まで罪を認めなかったので、犯人は分からずに、祐二の殴られ損となってしまったのだが、祐二が犯人ではないという事が分かってても、駒田は一切謝罪はしなかった。

それどころか、

「日頃の行いが悪いから、こういう時に疑われるんだ」と、吐き捨てるように言った。

祐二はこの時、生まれて初めて『殺意』というものを感じた。

きつと、この気持ちを抑えきれなくなってしまった時、人は人を殺めるのだらうと、殺人犯の気持ちが分かった気がした。

それ以来、駒田と顔を合わせるのが嫌で、学校もサボりがちになり、学校自体も嫌いになってしまったのだ。

「祐二！早く支度しなさい！入学式に遅れちゃうでしょ！」

母親の和美が、一階のキッチンで朝御飯を作りながら、二階の自室にいる祐二に大きな呼び掛ける。

「はいはい…。朝っぱらからそんなデカイ声出すんじゃないよ。」
ブツブツと文句を言いながらも、さつさと制服に着替えて一階へと降り、テーブルにつく。

「そろそろ出ないと遅れちゃうでしょ。急ぎな！」

入学式から我が子に遅刻してほしくない一心で、和美は祐二を急かす。

「分かってるよ。なんで母ちゃんがそんなに張り切ってるんだよ？」

「別に張り切ってないわよ。中学校は気持ちを入れ替えてちゃんに通って欲しいだけよ。」

「分かってるよ。あつ！もうこんな時間なんだ…。もう行くわ。和哉達と待ち合わせしてるからさ。」

トーストを牛乳で流し込み、祐二は急いで家を出た。

榊中学校の近くにある、白川神社に、小学校の悪ガキ仲間達と待ち合わせをしていた。

思ったより、早く着いてしまった祐二は、ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。

タバコの味など、一切分からないが、なんかカッコいいからという理由で、小学校5年の頃から吸っている。

「それにしても、あいつら遅せーなあ。まあ、時間通りに来るとは思ってたねーけど…」

独り言を呟きながら、タバコを吹かす。

「コラッ！タバコなんて吸って、お前はうちの学校の生徒か！？」
神社の前を通りかかった、頭の少し禿げた40代前半と思われる男が、いきなり祐二を叱りつけた。

「うちの学校って？榊中？」

「そうだ。俺は榊中で教師をしている、伊藤という者だ。お前はどこの中学だ？」

「…」

祐二は黙りこんでしまった。

教師というと、駒田のイメージが強烈すぎて、全く良いイメージが湧かない。

しかし、今回の場合はどう考えても、タバコを吸っている自分が

悪い。

素直に謝るか、ウソについて切り抜けるか、祐二は悩んだ。

入学初日から、喫煙現場を教師に見つけた自分のツキの無さを呪い、返答に困っていると、伊藤と名乗る教師は、祐二が全く予想していなかった言葉を投げ掛けてきた。

「見たことの無い顔だが…。お前、さては新入生だな？タバコを吸うなら、もっと人目につかない所でコッソリと吸え。分かったな？タバコくらいで、俺は文句なんて言いたくないが、あまり大っぴらにやられると、立場上何も言わないワケにはいなくなるからな。ハッハッハ。」

そう言つて豪快に笑う、伊藤という教師。ビンタの一つや二つは覚悟してただけに、祐二は呆氣に取られてしまった。

「そろそろ入学式が始まる時間だぞ！こんな所にいないで、早く学校に行け！」

伊藤はそう言い残し、学校の方向へと歩いて行つた。

「なんだ、アイツ…。殴られるかと思つたけど、なんか笑つてたし…。」

駒田とは全く違う対応。祐二には理解しがたい対応だ。駒田は、祐二が何かしでかすと、待つてましたとばかりに、暴力をふるつたのに…。

「祐二！今の榊中の教師だろ？何だつて？」

物陰に隠れて様子を伺つていた和哉達が、祐二の元に駆け付ける。

「タバコ見つかったんだけど、なぜかアイツ笑つてたし…。」

「マジ！？ありえなくね？」

「だよな。何なんだろう…。」

「まあ、いーべ。ラッキーだったっつー事で。」

「だな。そろそろ学校行くか。」

祐二、和哉、誠、博樹、邦生、薫、6人の悪ガキ連中は、入学式の時間が迫る榊中学校へと向けて歩きだした。

第一話：仲間

祐二達が、白川神社の裏手に位置する榊中学校に到着するのには、5分もかからなかった。

昇降口には、クラス別に名前が張り出してある。

榊中学校は、小さな中学校なので、一年は全部で4クラス。仲間の誰かしらとは同じクラスになるだろうと思っていた祐二は、張り出されたクラス表を見て、目を疑った。

和哉と誠はA組。

祐二はB組。

博樹と邦生と薫はC組。

「つつーか、なんで俺だけ1人！？意味分かんねー！」

祐二は、かなり大きな声で叫んだ。

「なんかお前らしいよな。ちょーウケる！ハハハ。」

和哉は、腹を抱えて大笑いしている。

「祐二、元気出せよ。」

「新しい友達出来るんじゃない？」

「榊小で一緒だった女が祐二のクラス、いっぱいいるじゃん！いいなあ。」

「登校拒否してクラス替えしてもらえよ！」

誠達も和哉同様に言いたい事を言い、大笑いしている。

「チクショー！バカにしゃがって！もういいですよ。」

祐二は、運命を受け入れたらしく、教室に向かった。

「アイツ、立ち直りも異常に早えーよな。」

誠は邦生と顔を見合せ、同時に同じ台詞を言っしまい、また大笑いした。和哉達もつられて笑う。

「いつまでも、笑ってんじゃねえ！お前ら、俺に続け！」

祐二が階段の踊り場から呼び掛ける。

和哉達も階段を上がり、教室へと向かう。

祐二達は知らなかったのだが、一年生が教室へ向うルートは、一階の廊下を歩き、職員室の前の階段を上がるというのが、榊中での一般的なルートなのだ。

昇降口前の階段を上がり教室に向うと、二年生の教室の前を通らなくてはならない。

二年生に顔がきく一年生は、祐二達を選んだルートでも問題は無いのだが、祐二達は二年生からは、入学前から目をつけられていた上級生から見たら、生意気な新入生という事だ。

「おい、見ろよ祐二達だぜ！？入学早々、二年の廊下通るってのは、ナメてるな。」

廊下にたむろしていた二年生の一人が呟く。

「何？？こいつらめっちゃ睨んでんだけど……」

薫はニヤニヤしながら、二年生の方を見ている。

一見、祐二達の中では一番おとなしそうに見える薫だが、実は一番好戦的で喧嘩早いのだ。

「薫、今はやめとけて。どーせ嫌でもそのうち上とは揉める事になるんだからさ。」

和哉は冷静に薫を諭すが、視線は一切こちらを睨んでいる二年生達から逸らさない。

「和哉の言つとーり！今はとりあえず教室行くべよ。」

邦生も和哉の意見に賛成し、祐二は今にも二年生に飛びかかりそうな薫を引っ張って歩きだした。

「イテテ。痛てーよ、祐ちゃん！そんな力いっぱい引っ張らねーでも、喧嘩しないから、平気だよ。」

薫は顔をしかめる。

「お前はいつキレるか分かんねーから危険なの！」

トラブルメーカーの薫を黙らせるのは、毎回祐二の仕事だ。薫は、何故か祐二にはあまり反抗しない。

昇降口から、教室までの道のりは距離のわりにはやたら長く感じられたが、祐二達は何とか始業の時間までに教室に入る事が出来た。

「はあ……。俺だけ一人っつーのはキツいなあ。」

黒板には、出席番号順に並べられた席順が張り出してある。

祐二の名字は

「矢崎」なので、出席番号は男子で最後。窓際から三列目の一番後ろの席だ。

クラス分けは、祐二的には最低だったが、席はまあまあのポジションだったので、少し救われた気持ちになれた。

「祐二、また同じクラスだねっ！」

右隣の席からの声。声の主は、佳奈だった。

佳奈とは、小学校が一緒に、クラスも何回か同じクラスになった事がある。

茶色に染めたサラサラの髪が、いかにも今風といった感じで、男子からもかなり人気があった。

「おおっ！佳奈じゃん！和哉達と離れちゃったけど、お前がいれば暇しねーわ。助かった〜。」

祐二は、心から思ったし、それをついつかり口に出してしまった。

「祐二つてもしかして、あたしの事、好きなんじゃないのー？？」

佳奈はいたずらっ子の様な表情で微笑む。

「好きなんかじゃねーよ！ただ知り合いがいなかったから、お前がいてよかったと思っただけっ！」

「なーんだ…。好きなのかと思った。」

佳奈は残念そうに呟く。

祐二は、佳奈の態度をどういう風に取りつていいのか、分からなかった。

正直言つて、佳奈の事は小学校の頃から好きだった。だけど、佳奈が自分の事を好きかなんて、考えた事もなかった。

もし、佳奈が自分の事を好きだというのなら、これほど嬉しい事はないが、お互い冗談を言い合えるような仲だし、真に受けて突っ走るの怖かった。

祐二は幼いながらも、祐二の気持ち、一方的なものであったとしたら、それが佳奈に知れた場合、佳奈との関係が今までのものではなくなってしまうような気がしていた。

今のうちに、気楽に遊んだり、話をしたりする関係を壊したくなかったのだ。

く A 組

「なあ、和哉。誰も男友達が同じクラスにいない祐二よりはマシだけれどさ、俺らのクラスって、榊小から来てる女はカワイイの一人もいねーぞ！」

誠は、唇を尖らせながらつぶやく。

「まあ、いーじゃねーかよ。他の小学校からカワイイ女が来てるかもしれないねーじゃん。」

和哉は、口には出さなかったが、佳奈と同じクラスになれなかった事が一番悔しかった。

小学校低学年の頃からだから、佳奈の事を想い続けてもう5年になる。

佳奈に伝える勇氣はなかったが、和哉達のグループと仲が良い佳奈達のグループと一緒に遊んでいるだけで、和哉は幸せだった。

「おおっ！新しい出会いってやつか！？俺らも中学に入った事だし、そろそろ彼女欲しくね？」

「まあな。第一歩として、誠はヤンキーファッションをやめた方がいいと思う。」

「うつせー！これは俺のポリシーだ！」

誠は、また口を尖らせた。

く C 組

「祐ちゃんと一緒のクラスがよかったなあ。」

薫は椅子にもたれかかり、天井を見上げながら不満を洩らす。

「ホントに薫は、祐二の事が好きだな。」

邦生は呆れ返った様子だ。

「薫の祐二好きは、もはや病気の領域だからな。」

博樹も邦生の後に続く。

「なんだよ？二人してそんな事言うなよ。俺は、祐ちゃんにはいっぱい助けてもらったから、感謝してんの！」

転校生で、皆と打ち解けられなかった薫は、祐二に遊びに誘われながら、急激に友達が増えた。

こうして、6人でつるむようになったのも、祐二がいたからだ。

祐二はそんな事をすっかり忘れていたが、薫は律儀にも、今だにその恩を忘れてはいないらしい。

く B組

ガラッ

「皆、席につけ！入学式の前にSHRやるぞ。」

教室のドアを開けるなり、担任の教師は言った。

佳奈と楽しく話していた祐二は、担任の顔を見てギョツとした。

祐二のクラスの担任は、朝、白川神社で喫煙していた祐二を叱った、伊藤という教師だったのだ。

「ヤッベ〜！俺、アイツ知ってる！」

祐二は小声で佳奈に話しかけた。

「何で??」

佳奈も小声で返す。

「朝、神社でタバコ吸ってたら見つかった…。」

「マジ!? 初日からヤバくない?」

「コラッ! 一番後ろの席の茶髪二人! 無駄話しないっ! まったく、入学式早々髪なんぞ染めて…。」

注意した拍子に祐二と目が合った伊藤は、祐二の顔を見て、何やら考え込んでいる。

「え〜と、君は… 矢崎君だな。俺のクラスの生徒だとは思わなかったよ。」

伊藤は、ニヤリと笑う。

「俺も、まさか伊藤先生が担任とは思わなかったよ…。」

祐二は苦笑いしながら、気まずそうに答える。

伊藤は祐二から視線を戻し、生徒達に向かって、こう言った。

「今朝、矢崎君にはちよつと言ったんだが、君たちも今日から中学生だ。榊中学校は、お世辞にも良い子ばかりの中学校とは言えない。中には悪い生徒だっている。俺は悪さをするなどは言わない。俺も君らぐらいの歳の頃は、良いこと、悪いこと、色々な事に興味があった。しかし、悪さをするなら、可愛げがある悪さをしなさい。人をいじめたり、傷つけるような行為を先生は一切許さないの、覚えておいて下さい。」

伊藤は、生徒一人一人の顔を見るようにしながら、真剣に語りか

ける。

何かある度に自分を目の敵にした駒田とは、明らかに異質な教師という事は、たった一瞬で祐二には理解できた。

「自己紹介等は、入学式が終了した後にする事にします。それでは、体育館に集合して下さい。」

伊藤はこう付け加え、教室を出た。

「さてと、廊下で和哉達を待つかな。」

祐二は呟きながら席を立つ。

「待つてよ！祐二。あたしも一緒にいくよ。」

実は、佳奈も祐二同様に仲の良い友達とは違うクラスになってしまったのだ。

「じゃ、A組の前で待つべ。」

祐二と佳奈は、A組の前の廊下に座り込み、和哉達が出てくるのを待つ事にした。

どうでも良いような話題で佳奈と盛り上がっていると、次第に生徒達は体育館に移動していく。

「おっ！佳奈じゃん。相変わらず、お前ら仲が良いなあ。またクラス一緒かよ？」

一人で廊下を歩いてきた邦生が二人を見つけ、声をかける。

「やっと来たよ。薫と博樹は？」

「そろそろ愛子達と来るんじゃない。あいつら、おせーから置いてきた。それにしても、佳奈も運が悪いよな。愛子達は皆C組で一人だけB組。まるで誰かさんみてーじゃん。」

邦生は祐二の方を見ながら笑い、祐二達同様に廊下に座り込んだ。榊小学校だった生徒達は、祐二達の事をよく知っているので、挨拶程度に声をかけ、通り過ぎて行くが、他の小学校から榊中に来た生徒の中には明らかに敵意を剥き出しにした視線を投げ掛けてくる者もいる。

祐二と邦生は、特に揉め事が好きというワケではないので、明らかに喧嘩を売っているような生徒も、特に相手をせずに無視する。そんな事を繰り返している間に、和哉と誠が教室から出てきた。

「佳奈〜！」

和哉達が合流したのと同じくらいに現れた愛子が佳奈に抱きつく。

「やーっとみんな揃ったな！体育館行こうぜ。」

祐二は、制服の尻をパンパンと叩きながら立ち上がった。

第二話：ヒロト

祐二、和哉、誠、博樹、邦生、薫、佳奈、愛子、早苗、里香、順子の総勢11名は、体育館に向かった。

小学生の頃から、常にこのメンバーで行動してきた祐二達にとっては、こうして皆と廊下を歩くのは、全く珍しい事ではないが、皆自己主張の強い外見をしている為、大人数という事を差し引いても非常に目立つ。

茶髪や金髪、だらしない腰パン、パンツの見えそうなミニスカ―ト、早速潰された上履きの踵……。ここまで初々しさのかけらも感じられない中学一年生は、そう簡単に見かけられないはずだ。

「あー、たりー。式とかどーでもよくね？」

両手をポケットに突っ込み、大あくびをしながら祐二はつぶやく。

「基本的にお前はなんでも、たりーじゃん。」

和哉は、祐二の口癖を嫌という程聞いてきたので、適当に流す。

二人で話ながら歩いていると、薫達よりもかなり前を歩いていた。こうやって皆でどこかに向う時は、いつもこうだ。

祐二と和哉は意識して早く歩いているワケではないのだが、気付くと先頭にいる。

二人立ち止まり、皆が追いつくのを待つ。

「ホント、いつもあいつら歩くの遅せーなあ。」

「きつと、俺らよりも足が短いからだ。可愛そうに……。」

祐二がそういうと、和哉と祐二は、二人して吹き出してしまった。

「てめーら、何こつち見ながら笑ってんだよお。」
誠が二人に問い掛ける。

「なんでもねーよ。ほら、行くぞ。短足ちゃん達。」

「短足だあ??」

「やつべー！和哉、誠番長がキレたぜ！」
祐二と和哉は走りだす。

こうして、仲間とふざけあえる事を、祐二はとても幸せに思う。
駒田に目の敵にされ、荒んでいた頃、心の支えになってくれたのは、仲間達だった。
この仲間達がいなかったら、きっとこんな風に笑う事もなかっただろう。

体育館のドアを開けると、祐二達以外の新入生は並べられたパイプ椅子に座り、入学式が始まるのを待っていた。

クラス別に区切られ、並べられているパイプ椅子の空席にそれぞれ腰を下ろす。

「また孤独な時間の始まりだよ……。」
祐二は呟きながら、和哉達と薫達を交互に見る。

和哉は誠となにやら談笑しているし、薫も邦生達とふざけ合って

いる。

「ったくよお……。つまんねー。」

祐二は、外に目をやった。

その瞬間に左隣に座っていた生徒と目が合った。

「んだよ？」

「俺、木田小から来た、葛田博人。矢崎祐二君だよな？」

「そーだけど……。なんで俺の名前知ってんの？」

「有名人じゃん。」

「そっか？まあいいや。俺さ、クラスに知ってる男が誰もいねーのよ。暇つぶし相手になってくれよ。」

祐二は、友達とか仲間とか、そういう言葉を軽く使いたくなかった。

だからといって、『暇つぶし相手』という、博人にはかなり失礼な表現になってしまった事を、少し悪いと思った。

しかし、博人はあまり気にしていない様子なので、祐二はホッとした。

間もなく入学式が始まり、祐二にとってはどうでもいいような話や挨拶が、延々と続く。

そんな退屈な時間も、博人と知り合いになったお陰で、あつという間に過ぎていった。

博人の話では、祐二達は自分達が思っている以上に名前が売れて

いるらしく、祐二達を倒して名前を売ろうとしている輩も多いらしい。

「俺らなんか倒したって、何の自慢にもならねーのになー。」

「そんな事ないでしょ？それに、祐二君の彼女を狙ってる奴も多分沢山いるよ。」

「は？俺、彼女いねーし。」

「北原さんと付き合ってるんじゃないの？」

「佳奈と？別につきあってねーよ。」

付き合いたいののは確かだけど…と祐二は心の中で付け足した。

「ふーん。そうなんだ。みんな付き合ってると思ってるよ。」

「勝手に思ってなさいって感じ。」

博人は相当話好きのようで、話題が次から次へと出てくる。

博人の質問に答えたりしていると、あっという間に入学式は終わってしまった。

祐二は入学式という言葉から、耐え難い程退屈な時間を想像していただけに、博人に少しだけ感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269c/>

サクラの花が咲く頃に

2011年1月13日15時11分発行